

「お兄ちゃん」「幸太郎さん」とお互いに呼びあう兄弟も今年は大学4年生と高校3年生になる。そして、4月に行われるオリンピック選考会ではライバルとして試合に望むことになる。まだまだこれからの選手であるがここまでの道程は決して楽なものではなかった。でもこれから苦労しようと思うので楽なものであったと思いたい。

兄弟との出会いは、兄・基一郎が小学校5年、弟・幸太郎が小学校2年の春であった。ともに木登りとか高いところが好きだったのでお母さんに薦められ米子市飛び込み教室に入って来たのが始まりであった。皆がびっくりするようなことが好きで、とにかく目立ちがちな性格で明るい少年たちであった。飛び込み競技は初心者のうちには克服競技であるのでこの明るい性格がまんまと功を奏したといえる。入門一年目は自分達の好きなようにある程度の遊びを入れながら自由に練習させた。飛び込みの本来の楽しさや難しさを自然に身につけて欲しかったからである。といえはかっこ良いが、こいつらに「こうやってやりなさい」と言っても10分もするとすぐに遊びに走るし・・・ある日、幸太郎が「先生10M飛んで良いですか」と鼻を垂らしながら聞いて来たことがあった。私が「まだ早いからやめとけ」というと「一本で良いから」と再度言って来たので渋々OKを出した。10Mにあがって多少躊躇しているようなふりをしてすぐに飛んでしまった。プールから上がってから基一郎に向かって「おにい、できんだろうが」と得意げであった。思わず笑ってしまったが、この時から兄弟のライバル意識が芽生えていたのである。でも本当は鳥取国体の年であったので「こんな小僧かまっちゃおれん」という気持ちであった。こんな状態で一年目を無事に終わり二年目が始まった。

二年目のシーズン途中で私はふと来年の全国ジュニアオリンピックのことを考えて基一郎に誕生日を聞いてみた。彼は早生まれであったのだ。ということは中学一年で小学生と勝負ができる。「これは

チャンスだ」と思った。この時から基一郎とのマン・ツー・マン的な指導が始まった。種目は1Mの飛び板飛び込みで演技種目数も少ない。板を踏み込んでいく技術の習得には10年を要すると言われるようにすぐに身につく技術ではない。反復練習をする中で演技も一つ一つ覚えて行かなければならない。あと1年で「全国大会で入賞する」「日本水泳連盟ジュニア強化選手に選ばれる」という二つの大きな目標ができたのはこの時点である。

翌年、生まれてこのかた東京方面に行ったこともなく、ましてや寝台車に乗るのが初めてで一人で寝ることができるかなどと心配する基一郎を連れて全国ジュニアオリンピック大会（水戸）に出場した。一年間の練習でまあまあうまく飛べる程度にはなっていたが、私の極め付けは「基一郎、入賞したら上野動物園に連れて行っただぞ。」という初歩的な心理作戦であった。結果は7位。その年から大会の年令制限が変わったことや、入賞が8位までとなったことから、こいつは強運の持ち主だと感じたものだった。

中学2年となり今年こそは日本水泳連盟の強化選手入りを目指そうと高飛び込みに重点を置いた練習を行った。全国中学校大会（会津若松）で「後ろ踏み切り前宙返り2回半」を最高のできでノースブラッシュにまとめ高飛び込み第2位となった。それが評価され12月にジュニア強化選手に選抜された。あの演技は、基一郎の飛び込みに限らずに、人生を決めた演技であったと思う。

実はこの年のシーズンオフのある会議で私自身の人生に影響する事件があった。会議が終わって懇親会になり、お酒も入って皆が今後の強化などについて目ごろ思っていることを気軽に話し合っているときであった。私も今年2位で来年さらに飛躍を望んでいたのが現状の問題点を今崎良治先生（現県水連強化部長）に話していた。あまりにもしつこい私の話で今崎先生は「お前、本当にやる気があるのかいや」と最後に言われた。後で考えると「俺は本当にやる気があるのかな」と思った。自分自身を振り返ることができたのだと

思う。自分が本当に選手に強くなって良い成績を取って欲しいと思っているのか。このことを自問自答して行くうちに、競技に対する姿勢がまだまだ未熟なことに気が付いた。施設や環境を変えるのは容易なことではない。ならば今ある施設でどうやったら良い成績が取れるのか。どうやれば勝てるのか。を考えたほうがすごく実のあることだと判ったのである。話は変わるが数年後、アメリカのホビー氏（元インディアナ大学飛び込みコーチ。数々のコーチの賞を得ている。）から世界チャンピオンを作る条件を聞いた。それは ①選手がいること。②コーチがいること。③環境が整うこと。④施設が整うこと。以上の4つの要素が飛び込みを成り立たせており完璧に4つが整っていればチャンピオンは作れる。そして、最後にこう言った。「4つの中で特に重要なものはコーチである。それはコーチは他の3つの条件を揃えることができるからである。」このようにコーチである自分自身ももっともっと考え、工夫することがまずは必要なのではないかと判ったのである（指導方法）。ただでさえ施設が少ない鳥取県の中でどのようなことをやれば充実した施設を擁する地域で練習している選手に勝てるのか。そして、指導の中でも選手がどうすれば勝てるのか（練習方法）。どうしなければならぬのかを考えさせるようになった。選手育成とは、「有る」ところから始まるのではなく、「無い」所から始まるのであると思う。そして、「できない」のではなく必ずできるという気持ちを持つことが大切で、今はできなくてもいつか必ずできるという気持ちが大切なのである。そこがスタートであり、練習方法とか選手自体が見えてくるときである。

この事件を経て次の年が始まった。この年は世界エイジグループの開催される年であったので、代表の座を目指していた。しかし、代表選考会は4月の下旬ということで実際のプール練習はできない状態であった。地元の練習は陸上練習のみでプール練習は試合会場に行ってから取り組むことしかできなかった。Bグループ（14～15

才）代表の座は1名。大阪のO選手（現早稲田大学）、岡山のA選手など強敵揃いであった。結局、失敗が響いて選手選考から漏れてしまった。そのときの悔しさ。将来的に見ても基一郎のほうがうえであったと思うからである。でも、負けは負けなのである。この負けた事が今シーズンの全国中学校2種目制覇、全国ジュニア五輪の2種目制覇の4冠へのエネルギーになったことは間違いなかった。負けた後の基一郎との会話は今でも忘れない。「全国中学で日本一になるぞ。種目は前3回半、後ろ2回半、後ろ前2回半・・・板はどうでもええ高飛びは絶対取るぞ」「はい」多少会話になっていないような感じもするが、言葉で言う必要もないものがあった。絶対、日本一になりたいと思った瞬間であった。

地元でプール練習ができるようになると自然と練習も激しさを増して行った。種目も難易度の高いものへと移行して行った。飛ぶのが恐くて何時間も台の上で粘られたこともあった。「飛ばないのなら帰れ」「お前が、帰らんなら俺が帰る」といって帰ったこともある。（本当は遠くから見ていたが・・・）とにかく本数を飛ばせたかった時期がこの年である。単純に言って、宙返りや捻りの感覚が身につく最後の年であったからである。恐怖感を感じる暇を作らなければ良いと思って、1時間に50回のペースで飛ばせたことがある。高飛び込みの種目は5種目であったので1つの演技を10回繰り返す、しかも10分以内に飛び終えること。時間オーバーになると最初から飛ばなければならない。台の階段を走って上がらなければオーバーしてしまう。高等種目であるので、気持ちを静めなければならない。よって、台の下に濃縮酸素を置いた。演技後にコーチングに耳を傾けさせながら酸素を吸わせ、走って上がる。まさに地獄のトレーニングであったと思う。しかし、彼はついてきた。

全国中学大会が迫って来るにつれ本数も半分の5本回しに減らした。会場の岡山プールに乗り込んでの練習で他のコーチから試合前なのに何故そんなに練習するのか。と言われた。この瞬間に勝った

と感じたが、再度気を引き締め試合に望んだ。1日目高飛び込み競技の決勝である。なんと嬉しいことにスタンドに今崎先生の姿があった。優勝が決まり先生の方にガッツポーズをすると先生もガッツポーズを返して来られた。プールサイドに降りて来られて基一郎に「ようやったな」と声をかけて下さり、「板は、ほどほどにしとけよ」とも言われた。次の日、あまり練習もしていなかった板飛び込みでも優勝してしまったのである。その日も先生が来られていた。「なんだいや、板も勝っちゃったかいや」と方言丸出しでニヤッと笑った先生の顔が印象的だった。

このペースで全国ジュニア五輪も両種目優勝した。このシーズンもう一つのこだわりがあった。それは、日本人初の前宙返り4回半という夢であった。高校生になると日本選手権を目標にしていたので、演技種目を総て10Mに上げなければならない。中学時代から高校への種目の移行は難しいものがある。実際に基一郎はどうするのかと、他のコーチからたずねられたことがある。演技の型を変えて10Mに上げるのかという意味の質問だった。ひざを曲げて体を抱え込んで回るやり方とひざを伸ばして腰を曲げ両足を抱え込むやり方と2つあり、ほとんどの選手が後者を選び難易率のアップを狙うのだが自分には全くその考えはなかった。当時、基一郎は柔軟性に欠けていたので抱え型以外の演技は考えられなかった。前宙返りはそのままの種目で来年は乗り切り、他の種目のレベルアップを目指したのが高校1年の時だった。そうしなければ日本選手権では話にならない。それが整ってから前宙返り4回半の挑戦を始める。というシナリオをもっていた。種目自体がかなりの高難易率なのであせって怪我をしないように気を付けた。いつ、どこで飛んでも必ず決めて行ける種目、遊び種目というかジョーカー的種目を多くもっている者は試合になっても余裕をもてるからである。

高校に入学して宮城インターハイ、国体、ジュニア五輪とも高飛び込みは優勝できた。そうそうたるメンバーを相手にしての優勝は

内容的にも十分に評価の出来るものであった。その年、日本選手権では5位に入賞した。

高校2年時に世界大会（スウェーデン）の選手に文句なく選ばれ初めての国際試合となった。おかげで前宙返り4回半の取り組みは遅くなったが世界を見る事が出来た。体調万全、完璧な仕上がりで望んだ試合であったが結果は14位であった。試合にピークをもって来なければ何もならない。激痛感した。実際、一日前の練習では完璧に近い演技であった。（ちなみにその日の日誌に目標3位以内と記入した）一夜明け、世界は（勝負）はそんなに甘くないことを肌で感じた。正に、真夏の夜の夢と化してしまった。帰国して3日後、静岡インターハイが開幕した。この大会は2種目優勝を目標にしていた。高飛び込み優勝、板は優勝争いはしたが2位に甘んじた。しかし、このことが次年の宮崎インターハイに大きく意義のあることとなった。

高校最後の年、オリンピックイヤーでもあった。今まで温めてきた夢を現実にする年である。6月のオリンピック選考会にむけて前宙返り4回半の取り組みにも一段と熱が入って来た。今までその種目を見たことがないという人が殆どであった。私は中国の遠征やサザンクロス大会など通して数回目の当たりになっている。特にアメリカ選手のそれは私に自信を与えるものであった。飛び出しはこちらが勝っていたからである。問題は3回半から4回半に向かうときの水面のチェックが確実に出来るかということであった。私達はその点をイメージして数々の入水練習に取り組んだ。飛び出しが失敗すればそれだけ入水で失敗する確率も高くなる。飛び出し自体が不安定であったのでそれ用の入水イメージも描き実際に練習した。当時一体何をやっているのだろうと思ったコーチも少なくないと思う。しかし、私達は未知の物を自らの力で引き寄せようと必死だった。試合当日にハプニングがあった。4回半は種目番号が109Cであるがプールサイドに置く種目標示板の3桁目に「9」がないのであ

る。この辺にも日本人で初めて飛ぶんだという実感があった。いよいよその時がきた。通告員の「前宙返り4回半抱え型 難易率3.5 宮本基一郎君 米子高等学校」そして審判長の笛の合図。会場の空気が張り詰めたような感じで静まり返り、マスコミの人はカメラを構えたまま静止した。意を決した基一郎が飛び出した。最高の飛び出しであった。体を伸ばすのが少し早くて入水は決まらなかったが恐らく本人は踏み切った瞬間に「回った！よっしゃ」と直感したに違いない。それで伸ばしを速めたのだから見事な演技である。この見事な失敗演技に会場の関係者、選手達の口笛、拍手、歓声は凄くものであった。正に、日本の飛び込み競技の歴史に残る「得点38.85」であった。

8月、宮崎インターハイである。この大会も2種目優勝を目指していた。私自身も宮崎国体で経験しているがとにかく風の強いプールである。そのための風対策も十分に積んでの乗り込みであった。しかし、大会開始と同時に台風が九州を直撃した。かなり大型のものであった。そんな中で高飛び込み決勝が始まった。延期か実施かいろいろ論議されたようであるが始まったものは仕方がない。この時だけは勝敗は別として怪我のないように試合が終わってくれば良いと念じざるを得なかった。米子のプールでの強風どころではなかった。しかも前方からの風速20～25Mの風は驚異的な風であった。スタートの一步がなかなか風のために踏み出せないのである。後ろ向きに台の先端に立つことがなかなかできないのである。結果は2位。昨年、板で優勝している石川県の坂井選手が高飛び込みを制した。この時点で宮本のインターハイ高飛び込み3連覇の偉業は達成できなかった。また、米子高校2年連続男子総合優勝に赤ランプが灯ってしまった。何故なら、坂井選手は板飛び込みを得意とする選手で板を踏む技術は当時から日本のトップレベルにあったからだ。試合後、プールサイドで泣きじゃくる宮本に「まだ、試合は終わった訳ではない。」と声をかけるのが精一杯であった。宿舎の風

呂の中でいろいろと話しをし気持ちの切り替えを図った。板で勝つことも十分に理解しあえた。昨年のインターハイで最後まで優勝争いを演じたこと。しかも最後の種目で宮本がリードしていたこと。決して勝てない相手ではない、勝てる相手なのだ。次の日、風はおさまったが大会日程は延期になった。

板飛び込み決勝の日は晴れ間が覗いて穏やかな日であった。予選は第2位で通過、1位は勿論坂井選手である。誰もが坂井選手の優勝を信じていたであろう中、私達だけは違っていた。マークするのは坂井選手ただひとり。決勝の選手入場が始まった。坂井選手は高での優勝、予選でのトップ通過と気を良くしていたのか両手を高く上げてスタンドに応えていた。その姿を見て「これは勝てる」と直感した。坂井選手はあまり自分の気持ちを表に出さないタイプの選手であったからである。でもこちらも失敗は許されるものではない。一本一本確かめ合うような演技で競技をこなして行った。私は宮本以外選手の飛び込みは一切見ないようにした。坂井選手の得点だけには耳を傾けたが、その他は宮本が優勝をするうえでは関係のないものであったからだ。試合も終盤に入りスタンドで観戦している選手、監督と視線が良くあった。(試合中、私はスタンドばかり見ていたので・・・)そして、たいした失敗もなく最後の演技を終えることができた。坂井選手には間違いなく勝っている。優勝したと確信した瞬間であった。場内放送を聞くと、やはり優勝、宮本基一郎君。第2位 山賀健一郎君(石川) 得点・・・。なんと2位との差は5点ぐらいのものであった。坂井選手はたしか4位であったと思う。相手のコーチもこの時の試合はすごくおもしろい試合であったと今でもお互いに話に花が咲く。

彼は、高校を卒業して日本体育大学に進学し、数々のタイトルを獲得している。昨年の福岡ユニバーシアード大会では日本代表として出場し、後ろ踏み切り前宙返り3回半では参加選手中、最高得点をたたき出した。日本室内選抜では3M板で優勝している。板での

種目も「前逆宙返り3回半」という日本人として初めての特技を引っ提げての優勝である。今や日本のトップクラスで活躍している。だが今や彼の口癖となっている「僕はチャレンジャーです」という言葉の中には世界というものを確実に見据えていることが伺える。

そして今年4月。小学生のときからの夢、「オリンピック出場」をかけてアトランタ五輪選考会に挑む。たとえだめでも彼の瞳から夢が消えることはないであろう。たとえ選ばれても彼はおごる事なく次なる夢へと歩んで行くであろう。

彼の挑戦もまだまだ続くのである……。